

教祖が、一れつ子供可愛い親心から、やしろの扉を開いて、世界ろくぢに踏み均しに出られ、御存命のお働きをもって、たすけ一条の道の先頭にお立ち下されてより、既に九十余年、来る昭和六十一年一月には百年を教える。我我は、教祖百年祭を執行するにあたり、その元一日を振り返り、親心を偲び、今後の決意を新たにしたい。

百年は十年を十度繰り返して過した年月の重さを物語る。百という字の意は、白紙に戻り一より始めるを謂う。

親神様は、人間を創造られる時、九十九年毎に出直を繰り返させて、生み且つ育てられた。人間は、五分から生まれ五分五分と成人し、生まれ更りを重ねて今日を迎えた。

教祖百年祭の意義は、立教の元一日をたずね、ひながたをたどり、さらに、子供の成人を急ぎ込んで御身をかくされた元一日にかえり、親神様が人間世界を創造り給うた元初まりの思召である陽気ぐらしを實踐することにある。

天保九年十月、親神様は、「我は元の神・実の神である。」と啓示られ、教祖を神のやしろに貰い受け、初めて人間世界に現れ給うた。以来、教祖は、世界一れつを救いたいとの親神様の思召のままに、神一条・たすけ一条の道を歩まれ、五十年の長きにわたって、やまさかやいばらぐるふもがけみちも、心明るく通り抜け、真実の限りを尽して寄り来る人を育て、つとめの完成とさづけの徹底をもって、この世が陽気ぐらしの世界と立て替わるよう図られた。しかるに、親を慕い親を思う子供の情愛は、親に従うことの尊さを承知しながらも、容易には親の道に踏み切れなかった。教祖は、こうした子供の信条を不憚と思召され、定命を縮めて御身をかくされた。

しかしながら、教祖は、姿はかくしても存命で働く、と仰せられ、おとこば通り、世界たすけに夜昼の区別なくお働き下されて、その御導きは末代に及ぶ。

刻限に、「ひながたの道を通らねばひながた要らん。」と仰せられている。今こそ、全教あげて、御身をかくされてまで世界たすけを急ぎ込まれた親の心に溶け込み、一手一つに互い立て合い扶け合い、陽気づくめに勇んで、ひながたの道を通してただかねばならぬ旬である。

かねてから、「四方面鏡やしき」と教えられた教えを、些かなりと形に表したいと、教祖百年祭の旬に、東西礼拝場普請を提唱し、心をふしんして教祖にお喜びいただくとうと誓った。心のふしんの進むにつれて形の普請も進み、形の普請にひのきしんの真実を伏せ込むうちに、心のふしんも一段と進む。ともに末代つづくきりなしふしんである。

おふでさきに、

しんぢつにたすけ一ちよの心なら

なにゆへいでもしかとうけとる

三 38

と教えられる。

一言のにをいげは、人の運命を変える。それは、をやの声を聞く時、心の向きが変わるからである。一度のおたすけは、人の心を入れ替え、無い命をもお救いいただく。それは、をやの理を受けるからである。かくて心のふしんは、一人また一人と進み、世界一れつに及ぶ。これぞ、世界のふしんである。

みかぐらうたに、

九ツ ここまでついてこい

十ド とりめがさだまりた

一下り目

九ツ こころをさだめあやうなら

十ド ところのをさまりや

二下り目

と教えられている。

教祖百年祭のまたとない旬を迎え、にをいげ・おたすけに丹精して、教祖の親心を、長く末代に伝え、広く世界に弘めて、世界一れつ心のふしんを進めよう。日々に教祖のひながたをたどり、たすけ一条の真実を積み重ねよう。

にをいげ・おたすけこそ、我我の生命であり、至上の使命である。この使命達成の上に、とりめが定まり、ところの治まる陽気ぐらしを御守護いただける。

ここに全教一手一つの奮起を要望する。